

2021年度 日本インターンシップ学会東日本支部 第3回研究会報告

報告者 松坂暢浩（東日本支部 支部長）

2022年6月12日（日）13:30より第3回研究会を対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式で開催いたしました。当日は北海道から九州エリア等、全国から25名の参加がありました。参加者は、大学教職員だけでなく、民間企業など多様な皆様に参加いただきました。

運営委員の柴田仁夫先生による司会のもと、東日本支部長による開催挨拶と趣旨説明の後、インターンシップに積極的に取り組む企業2社より事例発表をいただき、発表後に質疑応答および意見交換が行われました。

1件目は、第4回榎本記念賞で秀逸なインターンシップを受賞されたMirai Ship PROJECT 主宰で運営委員でもある眞野目悠太様より「ミライシップによるオンラインインターンシップの取組み –目白大学の事例を中心に–」と題して事例発表いただきました。学部の専門性に特化し、オンラインインターンシップのプログラム概要、学生のアンケート調査を踏めた成果と課題について説明いただきました。また、オンラインにおいても学生が能動的に活動できるように、事前学習やインターンシップ期間内の振り返り、事後学習の取組みについて説明いただきました。特に、事前学習において、学生のモチベーション特性やストレス特性などを数値化する独自のレポート「ビノバージョンレポート」を活用し、インターンシップを通じてチームビルディングの成功体験を積めるよう工夫されている点が大変参考になりました。

2件目は、CSRやSDGsに積極的に取り組まれている株式会社大川印刷 代表取締役社長 大川哲郎様より「インターンシップ、誰のため？何のため？～現在のインターンシップを問いなおす大川印刷の取組み –社会課題解決実践型インターンシップ、18年間69名との軌跡–」と題して事例発表いただきました。大川印刷のインターンシップは、印刷業について知るための社内報作成や学生が取り組みたい社会課題解決のプログラムを実施しているとのことでした。大川様からは、本来のインターンシップの目的は、採用活動のためではなく、学生の成長や就業観の形成のためのものではないかとの問題提起をいただきました。特に、直接採用につながらないインターンシップであっても、学生の発想やアイデアの活用につながり、社員の人材育成や大学との関係性が深まるなどの受入側のメリットを挙げていただきました。

最後に支部長より、総括として、事例発表いただいた企業様のように、学生に対する人材育成として、産学連携によるインターンシップの可能性についてコメントがありました。

研究会後の参加者アンケートは15名の方から回答があり、研究会の満足度は「大変参考になった」「参考になった」あわせて87%でした。発表後の意見交換含めて盛会のうちに研究会を終えることができました。